

これからの 学校

第2回 伝統行事で育む人間力と郷土愛

このコーナーでは、学校の歴史や社会・地域の実情、生徒の特徴などを踏まえてスクール・ポリシーの策定や教育課程の編成を行い、特色ある取り組みを実践する高校の事例を紹介します。今回は、学校祭でのねぶた制作・運行を通して人間性を育てる青森県立弘前高等学校にお話をうかがいました。

地域に深くコミットし、街を元気にする 伝統の学校行事「弘高ねぶた」

青森県立弘前高等学校 進路指導主事 高杉和宏 先生



Point

- ☑ ねぶた制作はスクール・ポリシーに明記される伝統行事
- ☑ “人間力”をぐんと伸ばす試行錯誤の制作プロセス
- ☑ 遠く離れても色褪せることのない郷土愛の醸成

弘前の夏の風物詩として 市民に親しまれる伝統の学校行事

今年創立140年を迎えた青森県立弘前高等学校は、青森県の公立高校の中で最も歴史が古く、例年、東北大学や弘前大学をはじめとする国公立大学、医学部医学科、早慶やGMARCHなどの難関私立大に多くの合格者を輩出する県内トップクラスの進学校である。だが、進学実績偏重の学校ではない。

「進学校の自負はありますが、どの大学に何人合格させようといった数値目標はありません。テストの点を取れる生徒ではなく、“自走する生徒”を育てたい」と進路指導主事の高杉和宏先生は語る。

同校では「自学自習」「規律ある自由」「体力の増進」の3つを教育の柱とし、学業、学校行事、部活動のすべてに全力で取り組むことを奨励している。その上で育成したい生徒像に〈持って生まれたものを深くさぐって強く引き出す人〉を掲げる。これは、高村光太郎の詩『少年に与ふ』の一節から引用した「めざす人間像」だという。「学問や学校行事を通して物事を深く考え、生まれ持

った自分の資質を生かした生き方をさぐり、自ら答えを引き出す人間力を身につけてほしい。そんな意味が込められています。本校のOBには、『はやぶさプロジェクト』で有名な宇宙工学者の川口淳一郎さんがいますが、彼のように世界で活躍し、日本を元気づける人材が本校からどんどん出てほしいし、地域からもそう期待していただける学校でありたいと思っています」

地域と密接につながり、生徒の人間的な成長を促す格好の舞台が弘前高校には用意されている。70年の伝統を持つ学校行事「弘高ねぶた」だ。毎年7月の弘高祭（学校祭）の初日に開催するが、8月1日からスタートする「弘前ねぶたまつり」よりも一足早い夏の風物詩として、地域の人々に親しまれている。1年生から3年生までの全学年がクラスごとに制作した計18台の人形ねぶたと前灯籠が、夏の夜を照らしながら「ヤーヤードー」の掛け声とともに市中を練り歩く光景は壮観だ。

そして、この弘高ねぶたは伝統ある学校行事であると同時に、ねぶたの制作と運行を通じて、問題解決能力、責任感、協調性等の人間性の育成をめざすものとして、カリキュラム・ポリシーにも明記されている<図表1>。



図表1 スクール・ポリシー



※弘前高校HPのグランドデザイン

(http://www.hirosaki-h.asn.ed.jp/main/gakkou_joho/school_policy.pdf) より抜粋
カリキュラム・ポリシーの中に「弘高祭でのねぶた制作と運行による、問題解決能力、責任感、協調性等の人間性の育成」が明記されている。

学業をひととき脇に置き ねぶた制作に没頭する10日間

弘高ねぶたの制作準備は、弘高祭初日をめがけて約10日間にわたって行われる。この期間中、授業は午前中のみ。午後はねぶた作りに充てられ、土日となれば一日中クラス総出で制作に没頭する。受験を控えた3年生も例外ではない。県内屈指の名門進学校がなぜ、授業を脇

に置いてでも時間を費やし、この伝統行事を守り続けているのだろうか。そして、弘高生にとって弘高ねぶたとは、どのような意味を持つ行事なのか？ そんな問いに、自身も弘前高校のOBである高杉先生は次のように答える。

「どの地域でもそうでしょうが、祭りというのは、人々の胸を熱くする“土地の魂”そのものです。弘前の人間にとって弘前ねぶたまつりは、一年のうちで最も特別な一週間です。その高校生版である弘高ねぶたも、単なる学校行事を超えた街ぐるみのイベントになっていて、ねぶたをやりたいから弘高をめざすという中学生もいるほどです。弘高生にとってねぶたは、いわば青春を燃やす大切な1ページ。だから、いちばん熱を入れて制作に取り組むのは他でもない、最後のねぶたを弘高生活の集大成にしたいと願う3年生たちなんですよ」

教員は完全にノータッチで、生徒たちだけで制作に取り組むのも弘高ねぶ

たの伝統であり、大きな特色だ。

まず、弘高祭を運営する自治会（生徒会）が、卒業生を招聘してねぶた講習会や配線講習会を開き、そこから制作の準備がスタートする。「人形ねぶた」のテーマ選びはクラスによってさまざまだが、ねぶたの伝統的なモチーフである三国志や水滸伝などの武者絵を選ぶクラスが多い。制作は、人形係・前灯籠係・見送り絵係・土台係・配線係などチームを作り、役割分担して進める。人

図表2 ねぶた制作の様子



※弘前高校HP (http://www.hirosaki-h.asn.ed.jp/main/gakko_seikatsu/2023_hirokousai_nep.html) より



形ねぶたひとつとっても、下絵・骨組み・紙貼り・蟬引き・彩色など、複雑さを極める作業工程だ<図表2>。

「私自身も弘高時代に経験していますが、制作マニュアルも設計図も何もない白紙の状態から、クラス全員が試行錯誤を繰り返しながらねぶたを作っていく、そのプロセスに意義があるのだと感じます。何から手をつけてよいのかまったくわからず、右往左往するのが1年生。そこで、部活動の先輩に制作ノウハウについて教えを請うたり、前年に作った設計図を捨てずに残している先輩がいたら、そのコピーを取らせてもらったりしながら、懸命に制作に取り組む。2年生になると、前年度の失敗などを糧にして、今年こそ満足できるねぶたを作ろうという野望が芽生える。弘前大学に在籍するOBに知恵を借りにいく子たちもいます。そして、これまでに誰も見たことのないような、すごいねぶたを創り上げてやると意気込むのが、スキルと経験を積んだ3年生です。

過去の例では、竜をかたどったねぶたを作り、その口からドライアイスを出かせようと画策したり、クランクを利用してカシャー、カシャーと音を立てて動く人形を作った3年生のクラスもありました。3年生は歴代、ユニークなねぶた作りにチャレンジすることから、街の人たちが行う人気投票で上位に入るのはいつも3年生制作のものです。微笑ましいと思うのは、3年生たちが下級生の作業をちらちら観察しながら、困っているようであれば、アドバイスを回していること。弘高生としてみんなが誇りを持てる学校行事にしたいという気持ちが伝わってきます」

粘り強い「底力」を発揮するねぶた当日 問題解決能力・責任感・協調性を発揮

コロナ禍で中断を余儀なくされた2年間を経て、昨年度に続き今年度も「弘高ねぶた」が無事運行された。

当日は早朝から校門が開き、人形ねぶたの仕上げ作業に取り組む。タイムリミットは13時。たとえ人形が完成しなかった場合でも、作業はそこで強制終了となるのがルールだ。間に合うか、間に合わないか——ハラハラドキドキする展開の中で、「毎回、弘高生の底力を見せつけられる」と高杉先生は語る。

「作業が遅れに遅れ、当日になっても人形の色塗りさえ終わっていない、ねぶたの中の電球が点灯しないなど

といったハプニングも続出します。それまでの日々の中では準備に疲れて生徒同士の関係が険悪になり、衝突する場面なども多々あるのですが、この時ばかりはクラスのみんなが一丸となって必死に頑張るしかない。その様子が実にドラマチックです。そして、ほぼ全クラスがタイムリミットまでに帳尻を合わせ、ねぶたを完成させてしまう。見事だなあと毎年感動します」

進路指導主事ならではの興味深い分析も語ってくれた。最後の1～2時間で、完成まで一気に持っていく力のある学年は、大学入試へ向かうラストスパートも見事であり、よい実績を残す。反対に、ねぶたへの取り組みが甘い学年は、進学実績の面でも苦戦する傾向があるという。かつて、高杉先生が担任した生徒のエピソードが印象的だ。

「無口でおとなしい性格の男子生徒だったのですが、本人の希望でねぶたの原案を担当したのを機に、大きく成長しました。彼は自分が考える理想のねぶたを作るためには、一切妥協しない。困難な事態に陥っても諦めないで粘り強くクラスメイトを引っ張って制作に取り組み、みんなから一目置かれるようになりました。受験勉強もそんな調子で、総合型選抜では不合格だったのですが、最後まで粘り強く頑張った結果、一般選抜で東北大学工学部に合格。大学でも活躍し、工学部長賞や工学研究科長賞を受賞。現在も大学院博士課程で研究に励んでいます。彼のようなケースを見てきているので、弘高ねぶたは単なる学校行事という以上に、問題解決能力・責任感・協調性といった、生徒たちがこれからの社会を生きる上で必要不可欠な“人間力”を養う大きな役割を果たしていると自信を持って言えます」

それこそが、長きにわたって弘高ねぶたが同校で大切に受け継がれてきた秘密の一端なのだろう。

地域との交渉も生徒が担当し 社会に参画する責任と意義を学ぶ

弘高ねぶたの運行は、夕方の6時半から夜8時半まで2時間に及び、その間、運行コースに当たる弘前市の中心街は交通規制が行われる。マイカーやタクシーの通行やバスの運行など、市民の足に大きく影響を及ぼす学校行事だけに、ここ数年、学校サイドには「伝統にあぐらをかいて、地域の理解を得られなくなってしまったら、



いずれ弘高ねぶたは存続できなくなる」という危機意識があった。古川浩樹校長も事あるごとに、「ねぶたを運行できるのが当たり前のことだと思わないでほしい。道路を封鎖してまで、弘高ねぶたをやる意義は何だ？」と生徒たちに問い続けてきたと、高杉先生は振り返る。

「道路を封鎖してねぶたを安全に運行するためには、警察だけでなく、消防署や市役所、バス会社やタクシー会社、商店街など、本当にいろいろな方面へお願いに回らなくてはなりません。そういった交渉事を全部クリアして初めて運行が許可される。古川校長はそのことを生徒たちに知ってもらいたいという思いがあり、今年度は各部署へお願いにうかがう際に自治会の生徒たちを同行させたのです」

例年、大型バスは警察や警備員の誘導の元で運行しており、すれ違う度に事故の危険があったのだが、生徒たちは後日、市街地の交通道路地図を調べ尽くし、弘高ねぶたの運行を妨げず、なおかつバス利用者にも最小限の影響で済む代替運行ルートを探し出した。そして、「当日はこのルートでぜひ、バスを運行していただけないでしょうか」と、バス会社との交渉に臨んだ。最終的に自治会の提案をバス会社が受け入れてくれ、弘前市街で最も道幅の広く、バスの主要運行ルートに当たる大通りでは、初めて大型バスとすれ違うことのない安全な運行を行うことができた。ねぶたを回転させるアトラクションも心置きなく行うことができ、生徒も沿道の観客も大喜びだった。

「小さな変化ではありますが、自分たちが地域にコミットすることで社会の何かを変えられると、ねぶたを通して学べたことは、彼らの人生の大きな自信になると思います。また学校にとっても、生徒の社会参画という新しいチャレンジができました」

地域への感謝の気持ちを忘れずに 持続可能なねぶたをめざす

青森県では若い世代の県外流出が深刻化している。ある調査によれば、この20年の間に20代人口が半減したとの報告もある^(注)。全国各地の大学に進学した弘高卒業生のその後を見ても、そのまま県外で就職するケース

が多い。

「私たち弘前高校の教員は、全国に散った卒業生が、それぞれの場所で自分の人生を一生懸命に生き、力を発揮してくれたらよいと考えています。地元に残って内側から弘前を変えたいと思う人がいてもよいし、外から青森県をサポートしたいと考える人がいてもよい。本校のめざす人間像“持って生まれたものを深くさぐって強く引き出す人”とは、それぞれの立ち位置から社会を変えられる人材。進学した先の大学を変え、日本を変え、世界を変えられる力を持った人のことです。たとえ遠く離れたところにおいても、変わらぬ郷土愛を胸に秘め、青森県の新しい魅力を外から創り出してくれる、そんな人材を育てたいと思っています」

高杉先生の言葉を聞き、弘高ねぶたの存在意義について思いを新たにします。学校創立140年を迎えた今年度のねぶたには、弘前高校の卒業生有志らによる「同窓会ねぶた」も出陣し、沿道の見物客を大いに沸かせたそうだ。弘高ねぶたはいわば、高杉先生の言う「遠く離れていても色褪せることのない郷土愛」を育む重要な培養装置になっているのではないだろうか。

「そうかもしれません。弘高ねぶたは、弘高生のソウルみたいなもの。ねぶたを運行しているときは、どの生徒もみんなイキイキと楽しそうで、本当にいい顔をしています。この伝統行事を続けさせてくれる地元への感謝の思いを忘れずに、今後も弘前の街を元気にし、地域に愛され続けるねぶたをめざしていきます」

図表3 街を練り歩くねぶた



※弘前高校提供

(注) 東奥日報による集計 (<https://www.toonippo.co.jp/articles/-/1621293>)